
冷蔵庫の向こうは異世界でした。

メネ@未確認

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冷蔵庫の向こうは異世界でした。

【Nコード】

N5398V

【作者名】

メネ@未確認

【あらすじ】

＊自分の部屋のエアコンが壊れてしまい、暑くて暑くて死にそうな男子高校生。そんな中見つけたのは、唯一他人に自慢できる要素である「自分専用の冷蔵庫」。冷気を求めて高校生はそのドアを開け放った。だが――冷蔵庫の中には、冷氣ではなく異世界が広がっていた。

＊というおはなし。

＊ノリで書いたので、自分が他に書いている作品と若干毛色が違います。注意！

*トリップ・チート・ハーレムは無関係です。

*てけとーに書いたこの話が自作品の中で一番アクセス多くて泣けてきた

実はさ、こっち、お前のいる世界とは違うんだ。異世界ってやつ？（前書き）

感想、批評、誤字脱字報告などありましたら、遠慮なくどうぞ。

（・ω・）

実はさ、こっち、お前のいる世界とは違うんだ。異世界ってやつ？

うああああっ、あついいいいいっ。

近所への配慮を無視して思い切り叫ぶ。いつも「自重できることはステータスだ」としている僕でも、この暑さに耐えるのは無理だ。いや僕じゃなくても無理だ。もし熱に耐性を持っている人間がいるのなら、いくら出しても良いからその能力を買い取りたい。

しかし、マジでこの暑さは一体なんなんだ。今朝の天気予報じゃ「今日は気温が低く、比較的過ごしやすい一日になるでしょう」と言っていたぞ！ あれは嘘か、僕がひそかに恋心を抱いている女子アナの天使の如き笑顔は嘘だったのかああっ！

恨む、恨むぞっ。サエちゃんに嘘を言わせた天気予報士をつ。

僕はまたしても叫んでしまう。それから「自重しないこともステータスだ」という言葉を胸に刻む。刺青よりも深く刻む。近所迷惑など知ったことか、とにかく暑いんだよ！

そ、し、て。なぜこの日に限ってエアコンが効かないんだよ。故障か、おいお前故障なのか？ いいか、もう一度スイッチを押してやるから空気を読んで起動しろよ？ はいせーの、ぽていっとな。……おい、押したぞ。あと三秒待ってやる、早くしようにぜ、な。

しーん、じゃねえよこのポンコツエアコンがああああああっ。

リモコンを床に叩きつけながらあらん限りの声で叫んだ。投げるでは飽き足らず、右足でかかと落としをする――のは痛そうだからやめた。代わりにポンと優しく乗つけて、それから全体重を思い切

り掛ける。リモコンがみしみしとするのが伝わる。いい気味だこの野郎、高三男子の体重をなめんな！

ファーハハハと高笑いしつつグリグリと足の裏を押し付ける。壊れる壊れる、電氣量販店のベテラン店員も回収を拒否したくなるほどに壊滅してしまえ。そう思った矢先に、一際大きく「べきり」と音が鳴った。

とうとうとうるー！　ぼくは　りもこん　にしょうりした！　せんりひんは　こうかい　と　むなしさ　だ！

あつさ　がたちあがつてこちらをみている。なかまにしますか？
いいえ　をえらぶ。しかし　あつさ　にまわりこまれてしまった！

なんだこのクソゲー、選択肢の意味ねえええつ。

心の中で作成したロールプレイングゲームもどきに向けて、僕は叫ぶ。

……あ、やばい、倒れそうかも。ていうか倒れるってこれ絶対。
エアコン壊れて熱中症で死亡とか情けないにも程があるって。これにはさすがのサエちゃんでも苦笑しかできないって。いやいや高三で死んでたまるかあっ！　まだ生まれて十八年だぞ！　僕だって健全な青少年だ、せめて死ぬ前にサエちゃんと、……ぼぼ、僕、さ、サエちゃんと、て、手を繋ぎたいんだな。……と切実に願う、ガチで願う！

だが身体の不調には逆らえず、傍にあった机に突っ伏した。意外とひんやりとしている。わあ気持ちいい。左の頬をくつつけたら、右の頬もくつつけるべし。そうしながらふと薄目を開けると、目の前になにかが見えた。あれなんだっけ。ええとええと。

れっ、……冷蔵庫おおおおおつ。

いた！　救世主がいた！　なんで今まで忘れてたんだろう、アホ

か僕は！ ひゃっはあ、熱気は冷蔵だああああ！ 即座に身体を起こし、冷蔵庫を破壊するかのような勢いで扉を開ける。そして冷気が！ 来ない！ なぜだ！

え、……えええ？ なっ、な、なんで？ お、おいしい冷蔵庫くん。君、サボっちゃ困るよ、早く働いてくれよお。あと訊きたいんだけどさ、

その、あの、……あんた、誰？

お前誰だあああああつ。き、貴様っ、いやどうして冷蔵庫の中から人、の、顔、があああああつ。

いやったぞおおおつ、ついに、ついに繋がったあああああつ。

な、に、が、繋がっただよ！ 男に言われたくないセリフ一位だよそれ！ 僕そういう趣味ねーから！ なぜか分からんが、冷蔵庫の向こう側で男が踊り始めた。さっきは顔があつてよく見えなかったけど、なんか部屋っぽいのが広がっているみたいだ。なぜだなぜだ、もしかしてこれが僕の異世界様か！ 違うけどな！

ていうか冷気はどこいった、中に入っていたお楽しみパフェはどこに行きやがった！ おい、そこで踊ってる場合とちゃうであんた。なあキミ、僕のパフェ食ったやろ？ そやろ？ 吐き出せ！

しかしこちらの激情はまったく気に留めず、未だ小躍りを続ける男。あ、でもここから見たら少年の方が合ってるように見えるなあ……じゃなくてそれはどうでもいいんだよ！

とりあえず向こうに入らなければ、と手を伸ばしてみた。ずるりどぷり。「部屋で少年が舞う図」の全体が揺らめいた——と思ったら僕の手も一緒に波打ってる！ なにこれ気持ち悪い！ 驚いて手を引っ込めて安否を確かめると、指が少し細くなっていた。ていうか若干しなびたような気がする。

あーごめん、先に言っとけばよかったなあ。でも勝手に入れる方もまずいと思うぜ。

え、あ、すんません。……じゃねえよ、あんた誰だあああつ。

いつの間にかフィニッシュド・ダンシングしていた少年が、また顔を近付けていた。そして初対面の人間に向かってタメ口……あ、そういや僕もだ。他人の振り見て我が振り直せとはこのことか。だが直す気はさらさらない。なぜなら、この少年は僕より年下だからだ！ ……たぶん。

ところで熱いんだけど。ちなみにこれは僕の造語で、ネツいと読む。熱意と混同されがちだからもう使わないことにします。べ、別にただ間違えただけなんだからね！ 恥ずかしいからこれ以上言及しないで！

なあ、そこって「ニホン」だよな？ 合ってるよな？ 俺、間違っ
ってないだろ？

日本じゃなかったらどこだって言うんだよ。いつの間に瞬間移動
したんだよ僕。

そうかそうか、やっぱりそうだよな。じーちゃん、俺は成功した
ぞおつ。

いきなり変なことを尋ねてきたと思ったら、今度は推理少年のよ
うな宣言を行う妙な人。突っ込みどころ満載なんだけど、むしろあ
りすぎて何を聞けばいいか分からない。まずは生と死という命題を
問いかけてみようか。でも断わる……あれ、誰に言ってるんだろう。

とりあえず、おーいと呼びかけてみた。気付いた少年が喜びの舞
いを中断して、こちらに身を乗り出す。

もしかして、何か聞きたいことある？ 何でも言っていーいぜ。

な、に、も、か、も、だあああああつ。全部言え、貴様の持てる知識の全てを晒せつ。

あとついでに冷氣をくれ、という言葉も付け足そうとしたけど、直後の少年による「まかせろ」の叫びによって押さえ込まれた。そして、なぜかイートモ青年隊ばりの体操を披露し始めた。まあすぐに終わるだろう。……という期待は粉碎された。

前振りなげえ！ まずその場で謎のスピンしてからバック宙で着地した後にピースサインを突き出し倒立を行ってそこからさらにバック転をして、ぜえぜえはあはあと息を切らしながら笑顔を作りつつ親指を立てた。……そんなオープンングいらねえよ！ 早く言えよ！

うわははは、ど、どうだ。俺、すげえだろ。結構練習したんだぜ。

あーそうだな凄いな。だから早くしてくれよな。

unnecessaryな自慢をしてきたから軽くあしらってやると、どうしてか少年が奥の方へ行ってしまった。あれ、もしかして怒らせたかな。しまったっ、だから選択肢は選ぶ前にセーブしろと……！ ちゃん和其他のヒロインも攻略しないと、妹ルートには進めないんだぞ！

僕がまったく見当違いの後悔をしていると、当たり前のように少年が帰ってきた。しかも快活な笑顔で、息切れが無くなっている。まさかキミ、薬とかやってんの？ 吐き出せ！

まずなー、……へへ、これ絶対言ったら驚くぜ。聞きたい？ 聞きたいよな？

どうせその選択肢も意味ないんだろ！ 僕の脳内ゲームと同等じゃないか、もう少しひねってくれ！ ところで暑いんだが、この理由も説明してくれ！

うん本当に暑くて死にそう……あれ？ さっきよりは若干涼しい気がする。否、涼しい。間違いなくこの冷蔵庫――の向こうからだ。おい少年、冷房なのか、冷房付いてんのか？ もっと強くしろ！ そんなことを思っていると、ようやく少年が口を開いた。

実はさ、こっち、お前のいる世界とは違うんだ。異世界ってやつ？

へえそうなんだ。……えっ？

あ、やっぱり驚いた？ まあそうだよなー、普通はありえないよなあ。

にやにやと少年が笑っているけど、ありえないどころじゃねえよそれ！ 大発見っていうか、まず信憑性が全くない。ああでも、現に冷蔵庫は自らの役割を完全放棄して変な少年との会話を強制している。もしかすると本当、かもしれない。

だがしかし、本当に向こう側が異世界だったとしたら、絶対に訊きたいことが一つある。僕が最初から感じていたことだ。

待った、その饒舌な日本語はなんだ。異世界なのに、なぜ喋れるっ。

あーこれね。こっちの世界は科学がすっげえ進んでるんだけど、それで翻訳も簡単なワケさ。

え、マジで。

うんマジ。こっち見えるだろ？ そっちの貧相な部屋と違うの分かるよな？

貧相で悪かったなこの野郎、自分の部屋に冷蔵庫があるだけ他の奴よりは良いと思ってんだぞ！ と言おうとしたが、確かに向こうを見ると何も言えない。え、何あれ、未来都市のワンルーム？ というほどだ。凄く……清潔です。あとそのへんの機械は一体なんだ。さっき見たかぎりだとドアみたいだけど、奥に見えるガラスっぽいケースが綺麗。

……マジか……。今まで異世界といえは少し野性的なイメージを持っていた僕だが、それを九十八度ほど変えることにした。……あ、右端にある四角くて白い箱って、もしかしてエアコンかなあ。さつきから涼しいんだ。

でさあ、しばらくここを借りるぜ。いいよな？ もう決定事項だけど。

僕が向こうからくる冷氣に涼んでいると、少年が衝撃的な発言をした。決定事項っておい、尋ねておいて選択の余地なしかよ！ やっぱり脳内クソゲーと同価値じゃねえか！

さつきから年上を敬わない少年に対抗すべく、僕も衝撃の発言で迎え撃つことにする。きつとこれで、少年は驚くはず。驚かなかつたらへこむぞ僕。意外と弱いんだよ僕、チキンなんだよ！ まあいい、絶対に一矢報いてやる。さあ、せーの。

それよりキミ、ここにあったパフェはどこにやったの？

そういえばさあ、お前、サエちゃんには告白したの？

ふっざけんなああああっ。

気付いた時にはもう叫んでいた。これが叫ばずにいられるか！
だって――だって、折角買ったあの人気スウィートウの一週間限定
ご当地パフェが、この世界からなくなってしまったんだぞ！

信じられっかこの野郎、あれだろ？ お前が食べたんだろ？ 僕
のパフェ食ったんでしょ？ 吐き出せ！

いやだから食ってねえつつうの。あのな、もう一回説明するぜ？

せ、つ、め、い、は求めてないからっ。それよりパフェを返せえ
えええっ。

気怠そうにこちらを眺める少年に向けて大声を出す。ああ畜生、
なぜ日本には銃刀法なんてのがあるんだっ。もし銃が手元にあった
ら、迷わずこいつの頭を撃ち抜いてるね！ 銃弾が勢いを保ったま
ま、冷蔵庫の向こうにいけるかどうかは別として。あ、手を突っ込
んでから撃ったらいいんじゃない？

……とにかく、こんな説明で満足できる奴がいるかあああっ！
以左、きやつこのセリフを原文ままに抜粋すると「ねじれの位置に存
在する二つの異世界を光線を基とした人工的な線分で結ぼうとする
と、どうしても手の平大より大きい亜空間が発生するんだよ。だっ
て、ねじれていうことは本来接点が全くないんだぜ？ それを無
理矢理くっつけるんだから、まあそうなるのは目に見えてるよな。
で、その亜空間を塞ぐための装置がこっちにあって、それをすぐに
起動させたら亜空間は安全な空間になるんだ。たぶんそのパフェっ

てのは、こっちとそっちを繋いだ時の亜空間に光速に準ずる速さで巻き込まれて、それから空間を塞がれて、後どうなったかは知らん。亜空間の中で粒子化してるとか、どちらの世界にも属さないところで漂ってるとか、亜空間に存在するヒーロー戦隊アクーカンに食われたとかじゃねえの？」アクーカンでなんだよ！ 絶対ふざけてるだろお前！ つーか説明サッパリ分かんねえ！

お前ンとこの世界って、知能低いのな。こっちじゃこの説明で十分通じるぜ？

いや、異世界なんだから物理法則とかもいろいろと違うんだろ。たぶん。

それはない、法則は変わらねえよ。判明してるかしてないかの違いはあるけどな。

……なんで知ってんの？ 証拠あるなら出してくれ。

え、あ………たぶん。どっかの学者が言ってたんだよ。

たぶんなのかよ！ なんか期待して損した気分だ、そしてそんな釣り針に引っ掛かった自分が激しく憎いつ、あとパフェを返せこの野郎！ あんな説明ごときで煙にまかれる僕じゃないぞ若き少年よ、迂闊だったな！

……はて、少年って「若い」という意味もあるっぽいから、若い少年ってのは重複なんだろうか。残念ではないものの手元に辞書が無いため調べるといいうのは中止する。それから、クリスマスもついでに中止にしときましょう。

ていうかそれより、この冷蔵庫借りてもいい？ さっきからスル

ーしてるよね？

ふっ……良いだろう。ただし条件があるっ。

マジで？ あ、でもパフエは無理な。っーかさ、また買えばいいだろ、パフエくらい。

さりげなく甘美なる崇高なスイートウを蔑んだ少年を鼻で笑いつつ――僕は冷蔵庫の前から一步引いた。あーヤバイ、冷蔵庫の近くじゃないと暑い。そしてその暑さを防ぐために、僕は一つの条件を思いついていた。

馬鹿には見えないマントを翻しながら、僕は言葉を発した。「暑い」と心の中で思ったならっ、その時すでに条件は思いついていたんだっ！

キミの持つてるその冷房装置を、よこせえええっ。

初めに沈黙が生まれた。その後失笑が返ってきた。最後に白い目で見られた。

この野郎、今の俺の気持ちがかかってねえなああっ！？ ああそうさ、少年には完璧な冷房が効いてるんだからなっ。サンジューゴ度を超える……サンジューゴって名前があったらカッコいいなあ……。じゃなくて――その猛暑の中でエアコンが壊れ、そして頼みの綱の冷蔵庫すら貴様に奪われたこの気持ちが伝わっていないだとおおおっ！

うわああああっ、本気で暑すぎる、せめて冷蔵庫から流れてくる「あっち側」の冷氣にあたらなければ……。……なにこれ極楽。いい気持ちすぎて動きたくねえ。少年の白い目など知ったことか！

……本当に暑そうだな。

ああ暑い。だからくれ、早くくれ、それでパフェの件は半分許してやろう。

全部じゃねえのかよっ。

当たり前だあああつ。むしろその程度で半分許すことに感謝しやがれえええつ。

少年は「そんな馬鹿な、トウモロコシと小麦粉を混ぜて焼いた妙なクッキーの上に甘味過多のアイスクリームを適当に盛って更にフルーツが謎の組み合わせで乗っけてあって美味しくてもちもちした四角いわらび餅みたいなのが入ってるあの変なお菓子にそんな価値が!？」と言いつつも、とりあえず冷房を取ってくることに反感を抱いてる訳ではなさそうだった。

部屋の奥にあるガラスケースの中に入っていくと、……えっ？ど、どういふことなん？ てっきりエレベーターみたいなのかなアと思って眺めてたら、見事にその予想は外れていたのであった。お父さんお母さん、僕、テレポーテーションの瞬間を初めて目撃しました。いやなにアレ! 「起動シマス」からぶーんでバシユッでしーんってどういふことだ! 少年の世界は一体どうなっているんだあああつ!

しばらくして、「待機シマス」からぶいーんでシュパッでじゃーんってどうなってんだ! 少年が何食わぬ顔で帰ってきたけど、もしかして、事故とか起きることってあるのかな……マジで「いしのなかに いる」があるかもしれない、って超こえええええつ! 異世界恐ろしすぎる!

異世界への恐怖で呆然としていたら、「少年が目の前で立っている図」がぐらりと揺れた。それに続いて、継ぎ目すらない美しい形

をした球体が冷蔵庫の奥から転がってきた。慌ててそれを受け取る。

取ってきてやったぞっ。それ結構高いんだからな、普通の人はず買えない値段なんだぜ。

知るかつ。……で、コレ、一体なにがどうなっとうなっとうなるの？

それ握って、涼しさ求めたらいいんだよ。

待った、日本語で頼む。

え？ あ、え、に、日本語になってない？ もしかして機械の故障か？ 設定変えちゃったかな。

いや違うがな、ええと、説明を分かりやすくしてくれ。

少年はああなるほどねえと掌をこぶしで叩き、今度は懇切丁寧……と思われる説明を始めた。以下、きやつのセリフを原文ままに抜粋すると「その球体を手で掴むことによって電磁波の簡易式回路が脳に直接繋がって、『清涼を求める脳波』をその回路がキャッチして、さらに分析を行い使用者の一番求める温度と湿度を測定し、また使用者の求める範囲もキャッチしてるからその範囲にのみ温度・湿度の変更を瞬間的に変更可能なんだよ。それか、その中にいるとされるヒーロー戦隊キュウターイが現れて温度とかを変えるって習ったよ」キュウターイってなんだよ！ やっぱふざけてんだろお前！

しかしまあこの暑さに耐えられないことには変わりなく、藁というか毬にも抱きつく思いで少年の言うことに従ってみた。

ぎゅーと握って、涼しくなーあれと小さく唱えてみる。若干恥ずかしかった。……が、しかし、確かに。

な、なにこれ涼しい。

だろ、良いだろこれ。

あと二、三個売ってくれ。

無理無理。今そっちで使えるの、その部屋ただだぜ。外に持っていったら壊れるからな。

……は？　どういう意味？

そのままさ、と言いつつ少年はまたも訳の分からない説明を始めた。原文ままに抜粋、「亜空間が発生するほどの反発がそっちの世界から漏れださないように、お前がいる部屋だけをちょこっと弄ってあるんだよ。疑似異世界ってことかな。それで反発が中和されてまあドアを開ける程度だったら崩れないくらいには抑えつけてあるんだ。部屋の仕切りが無くなったらそっちの世界は壊れるかもな。ま、要はヒーロー戦隊チューワレンジャーが悪のハンパーツと戦ってるっていう解釈で良いよ」あんたヒーロー戦隊好きだな。

ヒーローのフィギュアでもプレゼントしてやったら、向こうの文明の利器を幾つか貸してくれるんじゃないかねえかなあと思いついた。よし、すぐに聖地で年代物から買い集めよう――。

そう思って部屋から出る直前、「そういえばさあ」と少年が口を開いた。

お前、サエちゃんには告白したの？

突然投下された爆弾の如き発言に、僕はしばし言葉を失った。言葉を失ったっていうか脳みそをごっそりとやられた。いま脳をCT

スキャンすれば、きっと黒色が大半を占めていると思う。もしかして、亜空間に持ってかれたかな。

いや——そんなことはない。脳はちゃんと働いている。そして、だからこそ、僕は、叫んだ。近所迷惑のレベルを超えた爆音を、僕の喉が発した。

なんでお前が知ってやがるんだ、情報源を吐きやがれえええええええええええつ。

そういえばさあ、お前、サエちゃんには告白したの？（後書き）

※内容で語られている説明は、すべて作者の妄想によるエセ理論になります。現実には当てはめて考えようとしないう方が吉です。

おいじーちゃん、落ち着けよ。

な、ん、で、お前が知ってるんだああああっ。

僕がもう一度叫ぶと、少年はハエを煙たがっているようなしかめ面を見せた。僕の声がうるさいってのか？ ああ、本人でさえうるせえと思ってるんだからな！ だがしかし、僕はいつに訊かねばならない。情報ルートは一体なんだ？ 誰に聞いたんだ？ さっさと吐け！

ぐるると肉食動物のように喉を鳴らしてみた。あ、これ意外とできる。モノマネ大会に出たらこれ金賞ものじゃない？ 得意げになってもう少し大きめに鳴らそうと、して、むせ、むせたッ。やばい苦しい！ 誰か助けて！ へるぷみー！

おいじーちゃん、落ち着けよ。

だ、っだれが、じーちゃんだっ。お前、の目は節穴な、の、かああっ。

え？ あ、おう、すまん。いやでもまあ、とりあえず落ち着けて。

落ち着け、るかあっ。さーあ、答えろ、どうしてお前が、さ、サエちゃんを知ってるんだああっ。

むせながら苦し紛れに言葉を掃き出していく。いや、吐き出すじやなくて掃き出す。吐き出してるのは言葉じゃなくて胃液まじりの唾液だからなっ！ ……うええ、冗談言ってる場合じゃないかも。

ささ、まずは深呼吸してー。

そーれ、イチ、ニイ、サン。吸ってえー、吐いてえー。……おいやっぱり吐いてるんじゃないか！ あ、でも若干は楽になった気がする。ありがとうラジオ！ 今は午後の六時過ぎだけど！

で、なぜサエちゃんを知ってるのかーお、に、い、さ、ん、に言ってみな？

悪かったって、許してくれよじー……にいさん。

グレートは付けなくてよろしいっ。はい、あと十秒以内に答えよ。配当は百点。

読心術を使いました。あ、読心術って言っても、機械だぜ。

困惑する僕に向けて、例のように少年は説明を始めた。以下原文
まま、「こっち側のモニターにはいろんなツールがあるんだけどさ、その中に『読心モニター』があるんだよ。なんでも人体に影響がない程度の微量なY線ーあ、これX線とは違うやつな。ちよっと前、じーちゃんが発見したんだぜ。すげーだろ？ で、まあこのY線、脳を通過するとその中の情報をいろいろとコピーしてくんの。だから相手の方にこのY線を向けて、跳ね返ってきたY線を解析したら、ちよこっただけ相手の脳内が分かるんだよ。それで今分かったのが、『パフェが！ パフェが！ ちくしょう少年ぶっ殺す！』と『なにこれ涼しい、凄く……快適です……』と『ヒーロー戦隊買いに行つて来よう』と、最後に『サエちゃんまじ天使。可愛い。嫁にしたい』だったんだ。で、つまりサエちゃんてレンジャーピンクの中の人かなあって思ってた」なんですすぐヒーローものに結び付けるんだよ！ そりゃ、もしピンク役になってたら録画して永久保存するけどさ！ しかし、その……あの……。こく、は、つくつくくくく、なんて

そのお、……無理無理！ 絶対無理！ テレビ局行ったってどうせ追い返されるし、もし会っても顔面紅潮でまともに顔見れないし、そんでストーカー扱いされて少年院に連れてかれて、えっとそれから……。

でさあ、告白はしたの？ してないの？

しっ、してるわわ訳がなろうがっ、あ、あ、アホなのかお前はああああっ。

なんでアホなんだよっ。お前男だろ？ さっさと告白しろよっ。

む、無理無理無理。だだだってあれだよ？ その——五歳年上なんだよ？

それがどうしたあっ。こっちの世界じゃこの前、年の差七十二歳の結婚があっただぞっ。

え、うそ、それマジで？ てことはつまり、僕がお祖母ちゃんと結婚するようなものか？ ……嫌だ、絶対嫌だ！ つーかなにそれ！ どっちかが年上好きでどっちかがショタコンかロリコン、ってどんなことになってんだよ！

うそだ、うそに決まってる……そんな世界がある訳がない！ ていうか信じたくない！ さっきまで異世界行きてーなーとか思ってたけど、それを全面否定させてもらうつ。……あのもしかして、その結婚で少年が……。

俺じゃねえよ、言っとくけどな。いやそれはどうでもいいから、早く告白しろ、男だろっ。

いいや断わる、断固として断わる。サエちゃんはな、テレビ越しだからこそ天使なんだよおっ。

ぐ……くそ、失敗したかつ。

なあーにが……失敗したって？ お前僕が悩んでるの見て面白がつてたのか、そうなのかあつ。

ちげえよ、じーちゃんには関係ねえよつ。

ぐぬぬ……またも僕を爺と呼称するこの少年には、一体どんな薬を付ければいいのか。馬鹿につける薬は無いというが、はたしてアホにつける薬は存在しているのだろうか。是非存在していてくれ、でなければ僕が代わりに鉄拳制裁をしてやらねばならないっ！

つーか、なに？ 僕って老けて見えるの？ 冷蔵庫の向こうに映る僕の年齢が妙なことになるだけなの？ もしそうだとしたら、少年も実は老人だったりするのかなあ。で、結局どうなんだ？ 本当にそうなの？ 答えろ！

あつ、ま、またじーちゃんって、……ほ、本当にごめんっ。

誠意の気持ちが少ないでもあるのなら、間違える原因を述べろおっ。これで何回目だよつ。

う、いやたぶん三回目。まだ少ない。

そういう問題じゃねえからこれっ。で、なんで僕がじーちゃんなの？ 似てるの？

そんな訳ねえ。それにじーちゃんすっげえ科学者だし、この辺の

機械作ったのもじーちゃんだし。

「お前と比べたらかわいそうなほどの天才なんだぞ」と僕がじーちゃんより馬鹿だと主張してくるこの少年、なぜか誇らしげである。頭良いのはお前じゃなくてじーちゃんの方だろうが。いや、確かに僕も天才科学者のじーちゃんがいたら友達やこいつに自慢してるかもしれないけど。

だけどそれはともかく、納得できない。どうして似てない僕をじーちゃんと間違えるっていうんだ？ あれか？ 少年が実は物凄く目が悪いとか失明してたとか、それともじーちゃんが死んで恋しくなってふと呼んじやったとか？ ……ないな。

それで、わけを説明してもらおうか。

あー、うん。えっとさ、この装置と同じ向きにさ、W O V ・ P D があるんだよ。

うおぶ……えっ？ もう一度。

W O V ・ P D。まあ、「動く遺影」って考えてくれたらいいと思うぜ。

つまりな、と少年はもはや常套句のように説明を始めていく。以下原文、「これはまあ生きてるときにやるもんだけど、故人の性格とかその他諸々を人間ドックとかで解析したデータを圧縮して、んでその後なんつか、メモリーカードみたいなものに圧縮データを入れるんだよ。それでデータを解凍できるソフトと映像化できるソフトとデータから人工知能を作るソフトを全部まとめて、遺影みたいにしたわけだよ。あとこれ、ちょっとハイテクな感じで年齢も操作できるんだぜ。で、若いし喋るし動いてるしで、思わず『じーち

やん』って呼びかけたくなるわけ。つまり変身するときに若返るヒーロー戦隊ジーチャーンが、たまたまお前の隣にいたって考えてくれればいいよ」またヒーローかよ。

なるほどあれか、お前はじーちゃんと僕とで二人同時に会話して、おざなりになっていた訳だな！　なんと失礼な奴め、やはり貴様には鉄拳を贈呈してやろう。そのままですか、それとも吐息で温めますか？　……そういや、この冷蔵庫の向こうに手をつっこんだら変な感じになるんだっけ。もしかして破裂とかするのかな？　超こええ！

ところで、少年。

少年って俺のこと？　で、なんだよ。

そのじーちゃんって、凄い奴なのか？

おう、すげーぞ。じーちゃんの発明に全世界が嫉妬したんだぜっ。

たとえばさあ、となぜか少年は説明をする。「さっきY線って言っただろ？　あれ発見したのじーちゃんだぜ。この装置の設計図作ったのもじーちゃんだし、WOPPD作ったのもじーちゃんだし、ついかに異世界を発見したのもじーちゃんだぜ。それにさっき渡した冷蔵庫装置の原理を開発したのもじーちゃん、座標転移型エレベーター……ああ、後ろのガラスな。あれの原案を企業に提出したのもじーちゃん。いやあ、世界がじーちゃんまみれだぜ？」それむしろ嫌だな。じーちゃんまみれって、もっと他に良い表現はなかったのか。「ま、もう死んじゃったけどさ」さらりと少年が言った。たしかに、遺影があるというのだからもう死んでいてもおかしくは無かったが、とりあえず驚いてみた。ああ、じーちゃん欲しかったな。ここにじーちゃんがいたなら冷蔵庫装置大量に作ってもらえるのに。

……あ、俺、そろそろ寝るわ。

え？ ま、待て待て、まだ八時にもなってないぞっ。お前は早寝早起きが教訓の小学生か？

小学生じゃねえよっ。こっちじゃもう寝る時間なんだよ、異世界だからな。

あ、ああそうか。そ、そうなのか。

折角ヒーローもののフィギュアで物々交換でもしようと思ったのに！ 止める間もなく、何か力が働いて、壊れるんじゃないかというほどの勢いで冷蔵庫のドアが閉まった。そういえばコレ冷蔵庫だったな、すっかり忘れていた。

突然沈黙。冷房がきちんと動いていなければ、これまでの会話が嘘だったのではと思うところだった。ありがとう冷房、まじ快適ですありがとう。

それにしてもこの冷蔵庫、もしかして元に戻ったのか？ 開けたらパフェが現れるんじゃないか？ わくわくしすぎて身体がてかてかと光りそうな程の期待を胸に、冷蔵庫のドアを開けてみ、

開け、

開けようとし、……………開かねええええええっ！ なにこれ！ すっごく重い固い開かなああい！ やべえ、もしかしてこれ壊れちまったのか？ 冷蔵庫壊れたの？

……いやいや、きっと大丈夫さマイハニー。たぶん少年が向こうで必死に掴んでるんだよ。むしろ怖い気もするけど、明日になったらきつと大丈夫さ。は、ははははは……。

ぶっ壊したらただじゃおかねえぞ少年、分かったかああああっ。

冷蔵庫に向けて叫んでみた。え？ 近所迷惑？ ああ、確かその
辺でダンボールに入ってたよ。飼い主に捨てられたんじゃないの、
知らないけどねっ。

おいじーちゃん、落ち着けよ。(後書き)

※作中で語られている理論まがいの説明は、すべて作者の妄想か空想になります。現実のものとはまったく関係ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5398v/>

冷蔵庫の向こうは異世界でした。

2011年10月8日06時43分発行